

近代英国翻訳論 — 解題と訳文 ジョン・ドライデン 前三篇

大久保友博

(京都大学大学院人間・環境学研究科博士候補生)

本稿は、17世紀後半のイギリスで活躍した桂冠詩人・作家のジョン・ドライデンによる翻訳論のうち三篇の新訳を試み、その理解に必要な情報の導入部を併せて簡便に提供するものである。すでに旧訳(佐藤 1988)があるが、訳・解説ともに古く誤りも含んでいるため、以後の英文学研究と翻訳研究を踏まえての更新が必要であり、また当該書が入手閲覧困難なものとなっていることから、ここに新訳を問う意義もあるかと思われる。構成としては、まず詩人当人の伝記的事実に短く触れ、そのうち「オウィディウス『書簡集』:序文」「第二雑詠集『杜』:序文」「ルキアノスの生涯」の三篇について、底本テキストの検討、内容・背景についての解説、そして日本語による抄訳の順にまとめて記述する。

0. ジョン・ドライデン小伝

ジョン・ドライデン(John Dryden)は、17世紀後半のイギリスで盛んに活動した文人で、日本でこそ知名度は低いが、公式に任じられた最初の桂冠詩人であり、詩作・劇作ばかりか批評にも筆をふるい、後世にも大きな影響力を持った。この時代ではミルトンに次ぐ英文学上の大物である。また翻訳史でも必ず触れられる最重要人物のひとりだが、翻訳を中心に据えた伝記的解説は(とりわけ日本で)なされることが少ないので、ここでまとめておく。

出身はジェントリ層、1631年イングランド中部にあるノーサンプトンシアの清教徒の家の長男として生まれる。年若い頃から上質の教育を受け、また成績は優秀だったようで、ウェストミンスター校から特待生としてケンブリッジ大学に入り、1654年には学寮の首席で卒業、そのあいだギリシア・ローマの古典に深く親しみ、後年存分に発揮される読解力が培われたと思われる。ゆえに大学での将来を嘱望されたが、卒業の同年に父親が死に、地所を相続するも一家の財政状況は思わしくなく、別の道を歩むことになる。

彼が世に出る頃のイギリスは清教徒革命後の護国卿体制下。運よく同じ清教徒の親類のつてから新政府の文官の職を得ることができ、そしてそこで外国語の書記官として勤めるかたわら、出版屋の雑文書きを請け負って生計を立てていたという。ところが体制は早々に崩壊、1660年の王政復古をもって官職を失ってしまう。

しかし時局を読むに長けた彼は、自分が共和政府の一員であったことを棚に上げ、チャールズ二世の帰英を言祝ぐ『アストライア帰還』を初めとした数多くの詩を手伝っていた出版屋から

刊行、さらに劇作にも手を着ける。またこの期間に居候先の貴族の妹と結婚もしている。1665年のペスト流行でいったん地元へ引っ込むも、1667年には長詩『驚異の年』と評論『劇詩論』を引き提げロンドンへ戻り、一躍名声を得て、翌年には王室から公的に認められた初の桂冠詩人となる。

そこから10年のあいだは実入りの良い劇作を中心に『当世風の結婚』『すべて恋ゆえに』といった話題作を発表、とりわけミルトン『失樂園』の劇化台本は上演されなかったとはいえ、原作をしのぐ売れ行きであったという。また政治・宗教・文学に関する時事的な風刺詩を数多く回覧・刊行させ、当時の著名な文人との論戦も交えつつ発言力も強めていったが、その歯に衣着せぬ物言いから、匿名で流通していた強烈な風刺の著者と間違われて暴漢に襲われ、重傷を負うほどに時の人であった。

そのなかで彼が出会ったのがまだ20代であった野心的書肆ジェイコブ・トンソンで、このふたりが黎明期の出版業界にあって、翻訳出版の新しい道をつけていくことになる。それこそが古典作品の競訳出版で、様々な詩人・文人たちによるギリシア・ローマ古典の翻訳を、まるで競演させるかのように一冊にまとめ、本として売り出すというものであった。ドライデンが編者的役割でその人脈から訳し手と訳稿を集め、トンソンがそれを積極的に売りさばくこの一連の出版は、ベストセラーを連発してゆく。

その皮切りが1680年のオウィディウス『書簡集』で、その次に1683年から出始めたプルタルコス『対比列伝』は総勢42名の訳者で取り組んだ一大事業、この二つの成功から1684年には作者作品を問わないアンソロジーとしての訳詩集である『雑詠集』も刊行開始され、これには連番が付されてドライデンの死後も続き、18世紀に花開く出版文化でその名を上げる多くの作家を生み育てる下地ともなった。

ドライデンもボワロー『詩論』の改訳のほか、代表作『アブサロムとアキトフェル』や『平信徒の宗教』を1680年代前半に発表するが、その盛名も1685年にジェームズ二世が即位した頃から怪しくなってくる。このとき彼はカトリックへ改宗するのだが、それがカトリックを信仰する新王への追従と取られ、さらに共和政府の文官であった過去と当時 cromwell を讃える詩を残していたことが表沙汰となり、その商業的文筆キャリアも相まって、日和見主義の金の亡者との非難を浴びることとなった。とどめは1688年の名誉革命で、ドライデンはあえなく失脚、桂冠詩人の座も論敵に取って代わられてしまう。

こののちの彼は健康を悪化させながらも自作より翻訳に打ち込むようになり、古典作品(のちに『古今説話集』として結実)や『フランシスコ・ザビエル伝』、デュフレノアの『絵画論』などの訳にも取り組むかたわら、ウェルギリウスの作品集の一環として『アエネーイス』の全訳にも挑み、1697年に刊行。そしてコーヒーハウスでは友人やとりわけ若者らと闊達に交わり、後進に大きな刺激を与えながら、1700年に多くの翻訳を遺稿として残しつつ永眠した。

1. テクストについて

旧訳およびに旧注釈書(佐藤 1980, 1988)では、19世紀末にセイントツベリが改訂した *The Works of John Dryden* (1882-1893) を高く評価して底本としているが、今となっては問題も少

なくない。本稿では現在最も信頼の置けるものとして、カリフォルニア大学出版が刊行している *The Works of John Dryden* (1956-2002) の本文を翻訳底本に採用し、旧注釈書(佐藤 1980)とロングマン刊の *The Poems of John Dryden* (1995-2005) の注も参考とした。

各翻訳論の出典は、以下の通りである。

「オウィディウス『書簡集』:序文」より

Dryden, J. (1680/1956). Preface to Ovid's Epistles, *The Works of John Dryden*, v. 1, Berkeley: University of California Press, 114.24-119.35.

「第二雑詠集『杜』:序文」より

Dryden, J. (1685/1969). Preface to Sylvæ, *The Works of John Dryden*, v. 3, Berkeley: University of California Press, 3.1-6.12.

「ルキアノスの生涯」より

Dryden, J. (1696/1989). Life of Lucian, *The Works of John Dryden*, v. 20, Berkeley: University of California Press, 225.18-227.25.

2. 内容・背景について

第一に押さえておくべきは、これらは他の 17 世紀文芸一般とは違い、いずれも出版されることを前提として書かれていることだ。17 世紀半ばまで文芸は宮廷人のたしなみで、主に内輪のものであり、印刷されることはあくまで副次的なことであった。たまたま書肆の手に入ったとか、あるいは著者側に特別な事情があったとか——出版が宮廷においてある種の〈恥〉であった時代では、文芸執筆と出版はすぐさま直結するものではない。また出版業界にしても王政と同業者組合の癒着が深かったため、検閲が言葉を縛り、誰も自由な出版を試みることなどできない状態であった。

ところが内乱がそれを一変させる。出版を取り締まる星室法院が王権の牙城として議会派によって解体され、王党派など各派の争いのなかで未許可の政治的パンフレットや作品が各所から乱れ飛ぶ。共和政府も代わる統制を敷こうとするも、一度崩れたものは簡単には戻らない。こうして既存の利権が揺らぎ、行為としての出版が馴染んだあとの王政復古期に、読者層が厚くなるのと相まって、本を出すことが自由な商業・主張として発展していくことになった。そうなれば、商才を持った個人が頭角を現してくるのは必定で、統制としてはほぼ有名無実化していた印刷法が 1695 年正式に廃止、ここから 18 世紀の出版文化隆盛へとつながってゆく(「ルキアノスの生涯」は、ドライデンと書肆の仲がやや陰悪だった時期に他の出版屋の依頼に応えて、自身の参加していない共訳書へ書かれたものだが、当時の出版業界の空気をよく伝えている)。

オウィディウス『書簡集』と第二雑詠集『杜』を刊行したジェイコブ・トンソンは、そんななかで現れた出版人で、17 世紀末から 18 世紀前半の書籍・出版文化とは切っても切り離せない最重要の人物である。若い頃に出会ったドライデンとの協働事業がその基礎となるのだが、その成功第一号が古代ローマの文人オウィディウスが『ヒロインたち』と題してものした架空の書簡集を訳した前者の書籍である。

ドライデンは訳者として参加するとともに、編者的役割としてこれら競訳書の前書きを書くことになる。ただし、当時のイギリスにおける前書きというものには、〈恥〉であった頃の名残から、出版の弁解や言い訳に使われるという伝統があった。またそこから論争の舞台としても使われるものでもあった。であるから基調として自己弁護や正当化の雰囲気があるのも否めない。ましてや競訳となれば、それぞれ訳の出来も方針も種々雑多、様々なものをまとめたものである。これらを正当化しようとするれば、やはりそれぞれが独自に自由にやってくれればいい、という方向性になるだろう。ドライデンもトンソンも、この様々な文人が集って競うように訳するというあり方は、相当な売りであると自覚していた。むろんこれまでも、誰かの訳を継いだり、個々に訳されたものを集めたりすることで、結果的に共訳書となるものはあったが、文芸出版として企画から共訳の形を取ることが新しいものだという自信が彼らにはあった。そしてその第一号に翻訳論が付されるわけだが、そのことが広告に特記されたくらいであるから、それなりの意気込みをもって、自分たちの企画の擁護にあたったはずである。

そのことを踏まえると、「オウィディウス『書簡集』:序文」でドライデンが釈意訳 (paraphrase) を弁護するのは納得できる。共訳という幅を許すためには、ゆとりのある訳をよしとするのが最善であるからだ。そしてドライデンはその正当化に、自らの得意とする中庸のレトリックを用いる。つまり、自分の主張したい意見の両側に極端なものをふたつ作り、あたかも自分の立ち位置がバランスを取ったもつともなものであるように見せる、そういう議論上のロジックである。実際の程度は関係なく、ただそう(見える)ものがあればいいわけで、そこで選ばれた両極端が逐語訳 (metaphrase) と模倣 (imitation) のふたつであった。

ここで大事なのは、もしこの文章を歴史的に読もうとするなら、ドライデンの説得を無邪気に納得してはいけないということだ。これはあくまでも方便であり、言ってしまえば翻訳の比喻と変わりが無い。たとえば翻訳とは野球である、と言われてなるほどと感じるのと同じだ。そもそもこの三つが同列に扱えるものなのか、あるいは程度問題として一列に並べられるものなのか、疑問に思ってしまうべきである。形と意味を対立させた議論は定義が不十分なあまり翻訳の批評にはほとんど役に立たないし、仮にも科学的な論文で自明のものとは扱おうものならば、物笑いの種である。ましてやこの逐語訳・釈意訳・模倣を、我々が日本語で想像するところの直訳・意識・翻案とも一致させてはいけない。そもそもこのふたつは異なる文学的伝統と文脈のなかにあるもので、とりわけこの論にあるような詩の話や韻律の制限を前提とした議論のなかでは、別種の技術論があいだに入ってくる。また直訳・意識という分け方や定義そのものが個々人のなかで異なることを考えれば、その弊害をまず避けるべきだと言えよう。

佐藤は翻訳論の根本としてドライデンのものを高く評価し、この意義を認めてからでなくては議論を進められないとまで言うが(1988: II)、むしろこの三つを並べるやり方はスタイナーの言うように〈不毛な三つ組〉であり(Steiner, 1998: 319)、単なるレトリックがドライデンの権威ゆえに後世へ影響を及ぼしてしまった〈呪縛〉のようなものである。

このような文章上の詐術は、同じテキストのホラーティウス引用部分にもある。ドライデンはこれを第一のものに関わるとして引いているが、原典の文脈を考慮すると恣意的だと言わざるを得ない。そもそもホラーティウスの『詩論』では、ここは条件節の一部であり、禁止する目的を限

っている。つまり無条件で逐語訳を戒めているのではないし、何よりもこれは〈詩論〉であるから、翻訳におけるそれを否定しているのではない。実は、簡単に言えば二次創作・本歌取りのような場合を想定して述べられたものだ。古代ローマにおいて詩を書く場合、その題材として先行の作品がよく使われた。既存の名作の一エピソードや設定などを借りるのである。そのときに、元の作品を引き写しては題材がしっかり自分のものにはならない、としているのだ。

無理にドライデンの分類に当てはめるとすれば、これは第三の場合に限った戒めとなる。デナムもホラーティウスの同じ箇所を引いているが、彼がドライデンの第三に分類される人物とされていることを考えれば、彼の引用は間違っていないことになる。だがドライデンとて古典を知らぬわけがないし、何よりこの『書簡集』そのものが、他作品に出てくるヒロインたちが手紙を書いたら、という想像の元に書かれた二次創作であるのだ。だがドライデン本人は『詩論』の文脈を削り、まるで逐語訳者そのものを責めるものであるかのようにして、あからさまに第一を貶める意図をもって掲げている。都合よく自己弁護に用いたととられても仕方がないやり口だ。むしろこの引用もドライデンの影響から後世には翻訳の戒めとして知られてしまうことになる。若い頃から出版のための序文や広告を仕事として請け負い、数多くの論争に巻き込まれてきたドライデンの筆致は、すでにじゅうぶん商業的なものであるし、詭弁的技術に満ちていることを忘れてはならない。

ではそういうレトリックの部分を抜きにして、それでも翻訳論として特徴的に見えてくるものとは何か。翻訳者の営みとして、歴史的・文化的なところ、あるいはドライデン個人が垣間見えるところがあるとすれば、それは何か。

まず前者を考えたとき、いくつかの要素が容易に見つけられよう。ひとつには、強烈な上昇志向・対抗心が挙げられる。とりわけ古典作品の翻訳がイギリスに先立って盛んだったフランスがその相手とされる。17世紀のフランスは、翻訳文芸を下地にした古典主義文芸が隆盛を極めたが、ここではその国を明確に模範・ライバルと見なし、乗り越えていこうとする意志が見える。また絵画との比較が何度も現れているが目立つ。そこには技芸というものを何かしら整理して論じていこうという姿勢がともにあり、ドライデンがあえて自身の訳業としてボワロー『詩論』やデュフレノア『絵画論』を選んでいることも無関係ではない。ほかにも言語なるものについての言及がことさらに目立っている。

さらに目を凝らせば、ある種のサークル性・仲間同士の内輪の存在といったものも透けて見えてくる。仲の良い文士の名前やその書き物を明示して参照するばかりか、それとなく彼らだけにわかるほのめかしを行うこともある。そしていきおい〈私たち〉という言い回しが、意見を表明するときだけでなく理想を語るときにも増えてくる。小伝の項でも述べたが、ドライデンを中心として様々な人脈がこれら競訳に動員された。翻訳論こそ付されていないが、トンソンと出した第一雑詠集には、様々なグループが関わっている。オウィディウス『書簡集』のメンバーに、ドライデンの周りに集まる文人集団、ケンブリッジ大学を通じての知り合いから、果ては貴族たちが作った翻訳サークルに至るまで。そしてこれらグループの存在と、今述べた向上心、フランスへの対抗心、技芸論といったものは、17世紀末のイギリスにおいてそれぞれ絡み合うものだ。

ただ、この点をもう少し詳しく見るためには、もちろんドライデンひとりだけでは足りない。その

ために役立つのは、「第二雑詠集『杜』:序文」でもその名前の出てきた貴族ロスコモン伯爵の『訳詩論』とその翻訳サークルおよびフランスとの関係、それからホラーティウス『詩論』がこの時期の評論や詩作に及ぼした影響や当時の言語観を見ていくことだ。次稿・次々稿とまずはこれらについての解題・訳文を経てから、そのあと翻訳論に現れるドライデン個人の要素を解題として説明し、続く後四篇の訳文へとつないでいくこととしたい。

3. 訳文

3.1. 「オウィディウス『書簡集』:序文」より

[...]

すべての翻訳は、この三つの題目にまとめるのがよいと思われる。

第一は、逐語のもの、すなわち著者を語単位・行単位で、ある言語から別の言語へと翻すことである。たとえば、この手法に近いのがベン・ジョンソンの訳になるホラーティウス『詩論』であった。第二の道は、釈意のもの、すなわちゆとりのある翻訳で、その場合、著者はけして見失われぬよう翻訳者によって目の届くことに置かれるが、その言葉は想念ほどには厳密に迎られず、また敷衍は許されても改変はされない。この種のもので、ウォラー氏によるウェルギリウス『アエネーイス:第四巻』の訳である。第三の道は、模倣のものであり、この場合、翻訳者は(このとき当人がその名を失っていなければの話だが)ある自由を身にまとう。それは言葉や想念からの逸脱だけでなく、その両方を時に応じて捨て去ること、さらに原典から何か漠とした手がかりだけを取り出して、思うままそれを下地に変奏することの自由だ。この種のものとして、ピンダロスの頌歌を二つ、ホラーティウスのものを一つ英語へと翻したカウリー氏の実践がある。

これらの方法の第一に関わるのが、我々が名詩人ホラーティウスの授けたこの戒めである。

Nec verbum verbo curabis reddere, fidus

Interpres——

[一語を一語で再現することにこだわるな、忠実なる

仲介者のごとく——]

「語単位の忠実すぎる翻訳をするな」、とここをロスコモン伯爵が見事に訳している。事実、忠実すぎるとは銜学の謂いである。これは一つの信仰であり、もの見えぬ熱狂的な迷信に起因するものと似ている。勲士ジョン・デナムが勲士リチャード・ファンショーに寄せた、その訳書『忠実なる羊飼』への詩句からこれを取り上げよう。

かの奴隷の道を、汝は気高くも向こうへ退けん、
言葉に言葉を、行に行を一つ一つ迎るかの道を。
新たなる気高き道なるものを、汝は求む、
そも翻訳を、かつ翻訳者をも成さんがために。
者ども残すは灰なるも、汝が保つは炎なり、
その意に忠実に、しかして誉れにはより忠実に。

逐辞に翻訳し、なおかつうまく、というのは不可能に近い。というのも、ラテン語(相当に簡素簡明な言語)はしばしば一語で、粗く狭い現代語がそれ以上でも伝えきれないものを表現する。

また、ある表現のなかに奇想が織り込まれていることがよくあり、これは英語にすると失われてしまうだろう——

Atque ijdem Venti vela fidemq; ferent.

[して同じゅう風卷^{しまき}が帆と望みとを運び去る。]

この思いを英語で逐字に表現し、なおかつそこから機知を、つまりほとんどの想念を打ち出せるほどの巧みな詩人が、我らが国にいるだろうか。

つまるところ、逐辞に写す者はすぐさま困難に苦しめられ、その多さゆえにそのすべてから自分を解放するなどどだい無理。その者は著者の思想とその言葉を同時に考え、別の言語においてそれぞれに対応するものを見つけ出すはめとなろう。これに加えて、その者は韻律という制限と脚韻という苦役に自らを縛り付けねばならぬ。それは綱の上で両足に枷をはめられ踊るようなものだ。用心すれば落下は避けられようが、華麗な動きなどは期待もできない。我々が最善とするものでも、それでもやはりつまらぬ仕事。なぜなれば、やりぬいた際の拍手ほしさに危険へ飛び込めば、素面の者でも首折ること免れぬ。同様の行制限のうちで試みたホラーティウスの逐字訳では、ベン・ジョンソンとて不明瞭を避け得なかったと我らは知っている。のみならず、ホラーティウス自身でさえもギリシアの詩人にはそれを免れえなかった——

Brevis esse laboro, obscurus fio.

[われ簡たらんとつとめて、漠となる。]

分かりやすさか気品かのいずれかが、たびたび欠けることとなる。事実ホラーティウスはホメロス『オデュッセア』冒頭三行の翻訳でこれらつまずきのどちらをも避け、二行につづめている——

Dic mihi Musa Virum captæ post tempora Trojæ

Qui mores hominum multorum vidit & urbes.

[歌え我に、詩神よ、かの男を、トロイア囚われの折以後、

人々の習俗あまと、街々を見たかの者を。]

詩神よ、かの男を語れ、トロイの包圍以後、

多数の町を、習俗さも様々を見たあの者を。——ロスコモン伯爵[訳]

が、その文章の少なからぬ部分であるオデュッセウスの受難はやはり省かれている。

‘Ος μάλα πολλά πλάγχθη.

[さも長々とさまよいし者を。]

これら奴隸的逐字訳の困難が考えられた末、近年の有名な才人二名、勲士ジョン・デナムとカウリー氏は、著者を我らが言葉へと翻す別の道、後者が模倣と呼ぶものを見いだすに至った。両名は友人であったから、この件について考えを互いに通わせたのだと思う。ゆえに、両者のその理屈にさほど違いはない、ただし一方の実践は比べてもかなり控えめであるが。私は両氏の思う著者の模倣というものを、後代の詩人が先に書いた者と同様に試みとして同じ主題を書くこととする。すなわち、その言葉を翻訳するのでも、その想念に縛られるのでもなく、ただその人物を模範ととり、著者が我らの時代・我らの国に生きていればやっただであろうと思われるように書くことなのである。とはいえ、両名のいずれかが私の定義の届く範囲で(カウリー氏がそう

呼ぶように) 著者を演ずるというこの制約なき道を実行しているとは、とても言い切れない。というのも、『ピンダロス風頌歌』では古代ギリシアの習俗や儀式が依然残されているからだ。だが、氏に引けを取る人物が、大胆な企てを真似するなどとなったとき、今後そういう革新例からどのような弊害が現れ出るのか、私にはわからない。我々の好むものを加えたり減らしたりすることは氏も認める道であるが、それはカウリー氏のみ許されるべきもの、しかもそのピンダロスの翻訳に限られるものなのだ。なぜならば、著者の思いを拒むとしたとき、超えるものを自分から出して埋め合わせできるのは氏のみであるからだ。ピンダロス是一般には謎めいた書き手で馴染みがなく、(我々の理解するところではの話だが) 見えぬところへ飛び立ち、その読者を釘付けにするものとされている。少なくとも荒々しく始末に負えない詩人が逐字に翻訳されては困る、その才気は激しいあまり繋ぎ止めもできず、闘士サムソンのごとくそれを振り切るのだ。カウリー氏のような奔放な才気の高みこそが、ピンダロスに英語をしゃべらせる上で必要となるなら、もはやそれは模倣以外の道ではなしえない。だがウェルギリウスなりオウィディウスなりのきっちりしたわかりやすい著者がそのように扱われ、その思想も言葉も原典から引き出されぬというのなら、もはや彼らの作品とは言えない。その代わりに新しく生み出されたものもあろうが、それはもう別人の手になる産物だ。この意味では、なるほど何かしら秀でたものが、ひょっとすると元の作品以上に秀でたものとして作り出されるかもしれない。ただし依然ウェルギリウスは、そのひょっとすればが起こるときから除かれねばならぬ。確かに著者の思想を知りたい者は、彼の除外にがっかりもしよう。だがそれは、負債の支払いを期待している人が贈物を贈られて、必ずしも満足するわけでないはずだ、ということでもある。正しく言明するなら、著者の模倣とは翻訳者が自らを見せるには最も都合のよい道であるのだが、死者の名誉名声に対してなしえる最大の不正でもあるのだ。勲士ジョン・デナム(本人が採った以上の自由を勧める人物)がおのれの工夫のわけを、訳書『アエネーイス: 第二巻』のその感嘆すべき序文で与えている。「詩想はとらえがたい精神であるため、ある言語から別の言語へ移し替える際にみな蒸発してしまう。ゆえに新しい精神を翻訳で加えなければ、残るのはただ〈余滓 *caput mortuum*〉のみとなろう」。正直に言って、これは逐字訳に対する良い反論となっているが、誰がこれを支持しようか。私見では、模倣と逐辞訳は避けるべき両極論である。ゆえに、そのあいだの中庸を私が提案しているとすれば、氏の主張の及ぶ範囲というものもわかるだろう。

この技芸の才に加えて、著者の言語と自身の言語どちらも使いこなせなければ、誰も訳詩などできない。我々は詩人の言語だけではなく、人と違う特徴、いわば他の作家からその者を際立たせる、そういう思想なり表現なりの本人特有の言い回しを理解しなければならない。そこまで来れば、あとは自分のなかを見つめ、自分の才を相手に合わせ、もし我らの言葉にそれがあれば、相手の思想に同じ言い回しを与え、もしなければ、中身を変えたり壊したりすることなく衣裳だけを着替えさせる、そういう時間となる。同じ配慮をもっと外側の飾り、個々の語にも払わねばならぬ。(滅多にないことではあるが) そういうものが逐字で美しく見えるのなら、それを変えてしまうことは著者に対する侮辱である。だがいかなる言語にも独自の語法が揃っており、そのなかで美しいものも別の言語ではしばしば耳障り、いや時として意味をなさぬこともあるのだから、翻訳者を著者の言葉といった狭い範囲に制限することは不合理なことであるといえよ

う。意味を損なわない表現をいくつか選び出せば、それでじゅうぶんなのだ。訳者も自らの鎖をそれくらいのゆとりができるほどには緩めてよいと思うが、さすがに考えまで一新してしまうと鎖はちぎれてしまう。この手段を使えば、著者の精神は移し込められようし、なおかつ失われることもない。であるから、勲士ジョン・デナムの主張した理屈が表現にしか当てはまらないのは明らかである。なぜなれば、正しく翻訳されたのなら、思想は別の言語でも失われなければならないはずだからだ。しかし思想を我々の知性へと届ける(実際にはその思想の形象や飾りである)言葉というものが誤って選ばれてしまうと、思想を不格好な姿でさらしたり、元の輝きを奪ったりすることさえある。それゆえ、表現に対して許されうる自由があるというわけだ。言葉や詩行を原典の尺度へと押し込める必要はない。概して、著者の想念というのは神聖不可侵なものとされる。オウィディウスの空想が豊かなものであるなら、その特徴もそうあるべき、そこで私が切り詰めてしまうと、それはもはやオウィディウスではない。その無駄な枝を剪り落とされて本人も得たのではないかと、反論を受けることもあるだろう。だが私は、翻訳者にそのような筋合いはない、と抗弁する。画家が実物から写生をするときでも、絵がよく見えるからなどと口実をつけて姿形や顔立ちを変える特権などその者にはないと私は思う。ひょっとしたら、目鼻を変えた方が、描かれる顔がもっと正確になることもあろうが、その者の仕事は元のものに似せることであるのだ。ただふたつの場合に限り、困難が生じたように見えることがある。つまり、その思想がお粗末なもの、もしくは下劣なものであることがはっきりしている場合なのだが、そのどちらにも同じ答えを返しておけばよかろう。そういう場合、そういうものは翻訳されてはいかんのだ。

—Et quae

Desperes tractate nitescere posse, relinquis.

[—しかしして

汝触れども輝かせらる望みなきものは、捨て置け。]

ここまで、私はあえて二名の偉大な人物の権威に抗する形でこの件の自説を与えてきたが、今は亡きお二方の名誉を傷つけるつもりはない。というのも、私は生前の両名を慕っていたし、亡くなりし今も敬意を抱いている。だが私がこう力説したあとでも、翻訳の褒むべきところが、作品へ新たな美を加えること、またそうすることで言語の転化によって被った損失が償われることにあるのだと、より目利きの方がお考えなら、私は喜んで感化され主張を撤回しよう。だがそれでもなお私には思えるのだ、我慢のならない翻訳が多すぎる真の理由というのは、著者の想念を密に求めすぎるからではなく、翻訳に必須の才分をみな持ち合わせた者がごく少ないからであり、なおかつ相当の学識に対して送られる賞賛も励みもごくごくわずかなものであるからだ。

つまるところ、今までの話をこの当作品に適用すれば、ここで読者は全翻訳の大半に、著者の想念からの自由なり変化なりを少しなり見いだすことだろう。ただ『オイノーネーからパリスへ』のそれだけは、カウリー流の模倣のうちにある。ここで、このご婦人たる著者はラテン語を解さないのだ、という申し開きをしておくと私は言われた。が、事実そうだとすると、そう言った者が憚れるほどの出来になっているとは思う。

私としては、自身が自分の与えた規則を破っていると認めるのもやぶさかでない。また正確

な翻訳が許す以上の自由を採っていることもだ。だがその分別学識でよく知られた多くの紳士諸君がそこへ加わってくれたので、必ずやその優秀さをもって我がしじりを十分に補ってくれると信じている。

3.2. 「第二雑詠集『杜』:序文」より

この半年というもの、私は(こう呼んでもよければ)翻訳病なるものをわずらっている。散文という悪寒(私からすればいつも退屈きわまるあれ)が発作として『同盟史』のさなか何度も起こり、今度は高熱が(先に続く)『雑詠集』のこの巻で起こった。とはいえ実のところ、この病状の変化が私にはある種の安らぎにも感じられた。テオクリトスの二、三の牧歌、同じほどのホラーティウス頌歌のところで、気が損なわれずにすむなど思ってもみなかったのだ。それどころか普段の執筆以上にそこへ楽しい何かを見つけた、いや少なくとも見つけたと考えて、自らすすんでルクレティウスやウェルギリウスと旧交を温めることにした。すぐさま向き合ったのが、かつて読んだときに強く引かれた箇所、こうして私はこの仕事へ自然と赴いたのである。動機としてはそこへすこぶる強い縁が重なったわけだが、その張本人も今や神の許しを得るもの。それこそがわがロスコモン閣下の『訳詩論』なのだが、その指針に従って御説を実践に移せるか否か、試みるまでは不安であった。なぜなれば詩歌の金言なるもの多くは数学の見かけの論証に同じ、図式はもっともらしくも物理操作ではうまくいかぬもの。我ながらだいたいはその教えに従っているものと思うし、むしろそれが正しくかつ有用であると私も頭でじゅうぶん納得している。それは言い換えれば、少なくとも数カ所ではその指針の実例が作れたと自負する、それほどうぬぼれを口にするでもある。とはいえここで自らの分を幾度となく越えたことも認めねばならぬ。なぜなれば、追加省略ばかりか、あまつさえ時にはおこがましくわが著者の講釈までもする始末で、このようなこと、オランダの注解者なら見逃してはくれまい。ただそういった詩行では、術学者のいまだ見つけざる、詩人のみ見出しえよう美をいくらか見つけられたのではと思っている。そして表現を多少取り除いたり切り詰めたところでは、希・羅語では美しいものも英語ではさほど輝かしく見えてこないと考えた上でのこととされたい。また引き伸ばしたところでは、ぼんくら批評家どもがいつも考えるようにすっかり私の頭から出たものとするのではなく、詩人のうちに潜んでいたもの、もしくはそこからまっとうに引き出されたものとしていただきたい。あるいはそのいずれの考えももっともらしくないならば、少なくとも私のものと相手のものが一体で、その人物が存命で英国人たればおそらくこう書かれたはずのものとしてほしい。

なぜなれば、その特徴を保ち、別物になるのを避けるとすれば、やはり翻訳者はその著者できるだけ好ましく見せることになる。翻訳とは人物デッサンのようなもので、そのときよし悪し二様の似姿があることは誰しも認めよう。輪郭正しく顔立そっくり均整確かで彩色だけはまあそこそこに描くことと、全体に息吹を与えようと姿勢・陰影のほか魂を入れてすべてをしとやかにすること、このふたつは違うものだ。優れた原典のつたない模写を見せられては、どうしてもいくらかの憤りが抑えきれない。ましてやウェルギリウスやホメーロスなどとなれば、堪えて見ていられるわけがない。その美は生涯わが倣いにせんとしてきたもの、ひどい仕打ちに面と向かってへぼ訳者と言ひ立てるかもしれぬ。あのオーグルビーの訳した詩人らと同じとられるなら、我

らがそれら著者を誉め、その泉から許された分をみな汲み上げたと告げたところで、希・羅に馴染みない英国の読者諸君が私なり他の誰かなりを信じてくれるかどうか。だがあえて言い切ろう、良き詩人に対する鈍い訳とは、その生きた体に対する屍ほどに違う。希・羅語を解するのに母国語には疎いという者も多い。英語の特性と妙味もほとんど知られていない。優れた才人として助けがなければその理解も実践も無理なのだ。広い教養に読書の幅が必要なだけでなく、我らのなかにいる数少ない優れた書き手から人と礼の知識に上流の男女の気ままな社交づきあいまでを咀嚼せねばならない。つまるところ、学識をため込みながらもそのあいだについた鏽を落とすことが必須ということだ。このごとく難しいわけである、英語の清らかさを理解し、批評として作家を良きと悪きに、文体を正格と破格に見分けるだけでなく、良き著者のきれいなところとひどく汚れたところをより分けることは、これら必要なものをみな、あるいはその大半を欠くために、この国の才ある若者のほとんどが、ほめそやされただけの英国詩人らを手本とおおぎ、あがめ思うまま真似をする、どこが疵でどこが幼稚で下らぬか、その思想のどこがその主題にふさわしくなく、表現のどこが思想を損なっているか、あるいはその両方のどの点が不調和となっているのかなどを知らぬままに。よって、人は外国語の訳へ挑む前にまず母国語の鋭い批評家であるべきことが必須と思われる。また言葉と文体を評価できるだけでは十分と言えず、いずれをも使いこなせなければならぬ。つまり著者の言語を完全に理解し、自らのものも自在に扱えねばならぬ。まったく翻訳者たるには、まったく詩人であらねばならぬということだ。また著者の想念を申し分ない英語に、詩的表現に、妙なる韻律にするだけでは足りない。これらみな、なすだけでもきわめて難しいが、まださらなる大仕事がある。これこそ世の訳者が十二分に考えてはおらぬ極意なのである。そのことはすでに一言二言それとなく触れてきた。すなわち、著者の特徴を保つこと、このことこそその人物を他の者と区別し、解釈せんとする相手をひとりの詩人たらしめるのである。たとえば、ウェルギリウスとオウィディウスは思想ばかりか文体や韻律までもたいへん異なっている。であるのに、そのいくらかを訳してきたわが国一級の詩人らでさえ、どうも各種の才分を混同してしまっているようだ。そして韻律の妙なる調べのみに心を砕くため、両者ともにたいそう似通ってしまい、原典を知らなければ、私とてその模写からはいずれがウェルギリウスでオウィディウスなのかまったく判断のつけようがない。ある故人の画家への反論で、よく描いた数多くの画、実物に似たるものほとんどなし、というものがあつた。こうなつた原因は、いつも対象の本人よりも自身に集中していたからだ。同様の訳者の場合、作品をなした筆致はたやすく見分けられるが、元の詩人が誰かとは私でもわからない。二人の著者が等しく甘美としても、やはりその甘さには、砂糖と糖蜜のそれほどの大きな差が生まれてしかるべきなのだ。[...]

3.3. 「ルキアノスの生涯」より

[...]

この文を書いている、私も翻訳一般について一言二言しゃべりたくなつた。この英国人ほど優れた国民などありえぬとはいえ、現状ではからすると我々はフランス人にはるか後れを取っている。なるほど至極まっとうな理由が挙げられよう。すなわち、この国では出版屋どもだけが、

この種の仕事を唯一請け負っており、しかもただ公の名誉よりも自分の実入りの方に腐心する連中ときていることだ。その下らんお雇い物書きへの支払いも渋るどけちなやつらで、仕上がりがさえすれば、その仕事の出来など気にもかけない。やつらは生計を本でなく、本の題名を売ること立てており、一刷をやったのけたら目的達成、泡を食わされた小売人たちから彼らやその執筆者へと飛ばされる恨み言などこれっぽちも耳を貸さない。かくして翻訳は出版屋どもの裁量に任せられ、その出来をまともに見極め報いる者もおらずじまい、一方で我々は、知識欲旺盛な人々にとって、そして知識の向上と伝搬にとって、きわめて役立つ一つの技芸を進歩させることもできなくなる。隷従を防ぐにはそう悪くない手だというのに。

きっと、あのプルタルコスPlutarchusの列伝やこのルキアノスLucianusのものにおけるごとく、才能資質有する紳士たちに金づるとしての無名作家以上の興味を出版屋が持たればこそ、読者はその伝移に著者の精神・魂ありと得心するのだと思われる。誰かがやっているように奴隷のごとく、その著者の言葉をみな追跡するべきではないのだと、この紳士たちはよく承知している。というのも、そうならば、我々のまったくなじめぬ新しい語法と文体の様式を導入する羽目になっていたに違いないし、またかつて我がドーセット卿Dorsetがスペンス氏Spenserのものに対して行った非難、すなわち、氏はなるほど賢しかな訳者であるため人がその訳文を解するには原典に当たらねばならぬ、と同じものを招くことになっていたろう。なぜならば、いかなる言語にも、そのまま別の言語へ伝えてしまうとどこまでも馬鹿らしくなるような、その言語特有の作法・語法があるからである。

読む値打ちのある翻訳者の資質とは、翻訳元の言語と翻訳先の言語に精通していることであるはずだ。だがもしどちらかの不足を認めるとするなら、原典の側においてである。著者の想念が何とか解せるほどには著者の言語がわかるとして、そこで自らのものが自在とあれば、その想念もおのれの言語で達意に表現することが可能であるからだ。だがそもそも後者なくしては、けて役立つものにも人を喜ばせるものにも至れない。それがなければ読書も苦行労役となる。

なるほど、いかなる言語にもその固有の語法に依存した美というものがおびただしくあろうし、それは著者の原語に習熟せぬ者の訳文では置き去りにされがちであろう。だがそもそもこうも言えよう、いかなる言語と言語のあいだであれ、ごくさいな言い回しの修辭までみな訳出するのは無理である。だがその者が著者の想念と精神をつかんでおり、自身の言語で文体・表現力を有しているのなら、その弱みで失われるものもみなたやすく埋め合わせられよう。

原典の真意と精神を何かしらもって書こうとする翻訳者であれば、著者のどの言葉にもけて迷ったりしてはならぬ。むろん著者の才気と想念を、主題の本質を、扱う技芸なり主題なりで用いる語を、みな完全に持ち合わせ、完璧に把握しているはずであるから、その上で、あたかも原典を書くかのように、正確かつ生き生きと自己を表現することになる。ところが言葉を置き換えて写す者は、その単調な移し替えであらゆる精神を失ってしまう。

スペンス氏Spenserがその訳でやったような変更を勝手に加えてもよい、などと私が考えていると思わないでほしい。その訳では、ルキアノスLucianusが優雅に冷やかしたり、品のある機知を用いたりしたところで、ビリングズゲートBillingsgateやムーアフィールドMoorfields、聖バルトロメオ祭りSt. Bartholomew's Feastのりがさつな表現を目にしたりする。そもそも私は、そのような翻訳者にではなく、著者の魂と才気を受け止められる人々

に対して書いているのだ。それなくしては、どのような骨折りも、自らを辱める以外の役には立たず、屠場に落ちこんだ著者を傷つけるだけとなる。

このあとに続く訳文において、読者に与えるべき規範はないと信じている。そこには、私がここで触れた教訓以上に強力な実例がある。そこから、翻訳者としてまさしく適格たる人物なら、その目的のためのきわめて有益な多くの規則を見出だせよう。だがそのような仕事に必要な当然の資質を欠く者にとっては、いかなる個々の教訓も、人を目障りな知ったかぶりにする以上の役に立つことがない。

.....

【著者紹介】

大久保友博 (OKUBO Tomohiro) 京都大学大学院人間・環境学研究科博士候補生、白鳳女子短期大学非常勤講師。翻訳理論・英国翻訳論史専攻。(大久保ゆう) 名義にて主にオーディオブック分野での文芸翻訳に携わる。連絡先: holmes@alz.jp

.....

【参考文献】

- Allen, R. J. (1933/1967). *The Clubs of Augustan London*, Hamden: Archon Books.
- Amos, F. R. (1920/1973). *Early Theories of Translation*, New York: Octagon Books.
- Barclay, A. (2002). Dating Roscommon's Academy, *Restoration*, 26(2): 119-126.
- Barnard, J. (2004). Dryden and Patronage, *The Cambridge Companion to John Dryden*, Cambridge: Cambridge University Press, 199-220.
- Brower, R. (1974). *Mirror on Mirror: Translation, Imitation, Parody*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Caldwell, T. (1996). Honey and Venom: Dryden's Third Georgic, *Eighteenth-Century Life*, 20(3): 20-36.
- Caldwell, T. (2004). Dryden and Denham, *Texas Studies in Literature & Language*, 46(1): 49-72.
- Caldwell, T. (2011). 'Sacred Bonds of Amity': Dryden and Male Friendship, *University of Toronto Quarterly*, 80(1): 24-48.
- Clingham, G. (2001). Knightly Chetwood's A Short Account of Some Passages of the Life & Death of Wentworth late Earle of Roscommon: A Transcription and Introduction, *Restoration*, 25(2): 117-138.
- Clingham, G. (2002). Roscommon's 'Academy,' Chetwood's Manuscript 'Life of Roscommon' and Dryden's Translation Project, *Restoration*, 26(1): 15-26.
- Craig, H. (1921). Dryden's Lucian, *Classical Philology*, 16(2): 141-163.
- Crown, B. (2005). *The Social Life of Coffee: The Emergence of the British Coffeehouse*, New Haven: Yale University Press.
- Davis, P. (1999). 'Dogmatical' Dryden: Translating the *Georgics* in the Age of Politeness,

- Translation and Literature*, 8(1): 28-53.
- Davis, P. (2001). 'But Slaves We Are': Dryden and Virgil, Translation and the 'Gyant Race', *Translation and Literature*, 10(1): 110-127.
- Davis, P. (2004). Dryden and the Invention of Augustan Culture, *The Cambridge Companion to John Dryden*, Cambridge: Cambridge University Press, 75-91.
- Davis, P. (2008). *Translation and the Poet's Life: the Ethics of Translating in English Culture, 1646-1726*, Oxford: Oxford University Press.
- D'Addario, Ch. (2004). Dryden and the Historiography of Exile: Milton and Virgil in Dryden's Late Period, *The Huntington Library Quarterly*, 67(4): 553-572.
- D'Addario, Ch. (2007). *Exile and Journey in Seventeenth-Century Literature*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Dillon, W. (1680). *Horace's Art of Poetry made English*, London: Herringman.
- Dillon, W. (1684a). *An Essay on Translated Verse*, London: Tonson.
- Dillon, W. (1684b/1971). *Horace's Art of Poetry made English*, 2nd ed., Menston: Scolar Press.
- Dillon, W. (1685/1971). *An Essay on Translated Verse*, 2nd ed., Menston: Scolar Press.
- Dryden, J. (1680/1956). Preface to Ovid's Epistles, *The Works of John Dryden*, v. 1, Berkeley: University of California Press, 109-119
- Dryden, J. (1680/1995). Preface to Ovid's Epistles, *The Poems of John Dryden*, v. 1, London: Longman, 376-391.
- Dryden, J. (1685/1969). Preface to Sylvæ, *The Works of John Dryden*, v. 3, Berkeley: University of California Press, 3-18.
- Dryden, J. (1685/1995). Preface to Sylvae, *The Poems of John Dryden*, v. 2, London: Longman, 234-257.
- Dryden, J. (1696/1989). Life of Lucian, *The Works of John Dryden*, v. 20, Berkeley: University of California Press, 208-227.
- Emerson, O. F. (1921) John Dryden and a British Academy, *Proceedings of the British Academy*, 1921-1923, 45-58.
- Engetsu, K. (2004). Dryden and the Modes of Restoration Sociability, *The Cambridge Companion to John Dryden*, Cambridge: Cambridge University Press, 181-196.
- Frost, W. (1955/1969). *Dryden and the Art of Translation*, Hamden: Archon Books.
- Frost, W. (1974) Dryden's Versions of Ovid, *Comparative Literature*, 26(3): 193-202.
- Frost, W. (1984). Dryden's Virgil, *Comparative Literature*, 36(3): 193-208.
- Frost, W. (1988). *John Dryden: Dramatist, Satirist, Translator*, New York: AMS Press.
- Fujimura, T. H. (1983). Dryden's Virgil: Translation as Autobiography, *Studies in Philology*, 80(1): 67-83.
- Geduld, H. M. (1969). *Prince of Publishers: A Study of the Work and Career of Jacob Tonson*, Bloomington: Indiana University Press.

- Gillespie, S. (1988). The Early Years of the Dryden-Tonson Partnership: the Background to their Composite Translations and Miscellanies of the 1680s, *Restoration*, 12: 10-19.
- Gillespie, S. (2004). Dillon, Wentworth, fourth earl of Roscommon, *Oxford Dictionary of National Biography*, v. 16, Oxford: Oxford University Press, 226-228.
- Gillespie, S. (2009). Translations from Greek and Latin Classics, Part2: 1701-1800: A Revised Bibliography, *Translation and Literature*, 18(2): 181-224.
- Gillespie, S. and R. Cummings. (2004). A Bibliography of Ovidian Translations and Imitations in English, *Translation and Literature*, 13(2): 207-218.
- Gillespie, S. and R. Cummings. (2009). Translations from Greek and Latin Classics 1550-1700: A Revised Bibliography, *Translation and Literature*, 18(1): 1-42.
- Gillespie, S. and D. Hopkins. (2008a). Introduction, *The Dryden-Tonson Miscellanies, 1684-1709*, v.1, xv-lxix.
- Gillespie, S. and D. Hopkins. (2008b). Biographical Directory, *The Dryden-Tonson Miscellanies, 1684-1709*, v. 1, lxxi-ci.
- Gillespie, S. and D. Hopkins. (2008c). A Reader's Guide to the Contents of M1, *The Dryden-Tonson Miscellanies, 1684-1709*, v. 1, cvii-cxviii.
- Gillespie, S. and R. Sowerby. (2005). Translation and Literary Innovation, *The Oxford History of Literary Translation in English*, v. 3, Oxford: Oxford University Press, 21-37.
- Gillespie, S. and P. Wilson. (2005). The Publishing and Readership of Translation, *The Oxford History of Literary Translation in English*, v. 3, Oxford: Oxford University Press, 38-51.
- Hammond, P. (1990). The Printing of the Dryden-Tonson Miscellany Poems(1684) and Sylvae(1685), *The Papers of the Bibliographical Society of America*, 84(4): 405-412.
- Hammond, P. (1991). *John Dryden: A Literary Life*, New York: St. Martin's Press.
- Hammond, P. (1995a). The Contents of Ovid's Epistles, *The Poems of John Dryden*, v. 1, London: Longman, 539.
- Hammond, P. (1995b). The Contents of Miscellany Poems and Sylvae, *The Poems of John Dryden*, v. 2, London: Longman, 431-436.
- Hammond, P. (1999). *Dryden and the Traces of Classical Rome*, Oxford: Oxford University Press.
- Hammond, P. (2004). Dryden, John, *Oxford Dictionary of National Biography*, v. 16, Oxford: Oxford University Press, 1018-1027.
- Hammond P. and D. Hopkins. (ed.) (2000). *John Dryden: Tercentenary Essays*, Oxford: Oxford University Press.
- Hayes, J. C. (2009). *Translation, Subjectivity and Culture in France and England, 1600-1800*, Stanford: Stanford University Press.
- Hopkins, D. (1986). *John Dryden*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hopkins, D. (1988). Dryden and Ovid's 'Wit out of Season', *Ovid Renewed: Ovidian Influences on Literature and Art from the Middle Ages to the Twentieth Century*, Cambridge: Cambridge

- University Press.
- Hopkins, D. (2000a). Classical Translation and Imitation, *A Companion to Literature from Milton to Blake*, Oxford: Blackwell, 76-93.
- Hopkins, D. (2000b). John Dryden, Fables, *A Companion to Literature from Milton to Blake*, Oxford: Blackwell, 232-237.
- Hopkins, D. (2005). Dryden and his Contemporaries, *The Oxford History of Literary Translation in English*, v. 3, Oxford: Oxford University Press, 55-66.
- Hopkins, D. and P. Rogers. (2005). The Translator's Trade, *The Oxford History of Literary Translation in English*, v. 3, Oxford: Oxford University Press, 81-95.
- Horace. (1929). *Ars Poetica*, Horace(Loeb Classical Library), Cambridge, MA: Harvard University Press, 442-489.
- Horace. (1989). *Epistles Book II and Epistle to the Pisones ('Ars Poetica')*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Jose, N. (1984). *Idea of the Restoration in English Literature 1660-71*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Kelly, L. (1979). *The True Interpreter: A History of Translation Theory and Practice in the West*, New York: St. Martin's Press.
- Kitagaki, M. (1981). *Principles and Problems of Translation in Seventeenth-Century England*, Kyoto: Yamaguchi Shoten.
- Lipking, L. (1970). *The Ordering of the Arts: in Eighteenth-Century England*, Princeton: Princeton University Press.
- Lynch, K. M. (1971). *Jacob Tonson: Kit-Cat Publisher*, Knoxville: The University of Tennessee Press.
- Mason, H. A. (1990). Clique Puffery in Roscommon's Essay on Translated Verse?, *Notes and Queries*, 37. (3): 296.
- Murphree, D. S. (2004). Tonson, Jacob, the Elder, *Oxford Dictionary of National Biography*, v. 55, Oxford: Oxford University Press, 1-4.
- Niemeyer, C. (1933). *The Life and Works of the Earl of Roscommon*, Ph. D. Dissertation of Harvard University.
- Niemeyer, C. (1934). The Earl of Roscommon's Academy, *Modern Language Notes*, 49(7): 432-437.
- O'Sullivan Jr., M. J. (1980). Dryden's Theory of Translation, *Neophilologus*, 64(1): 144-159.
- Renner, F. M. (1989). *Interpretatio: Language and Translation from Cicero to Tytler*, Amsterdam: Rodopi.
- Robinson, D. (ed.) (1997/2002). *Western Translation Theory from Herodotus to Nietzsche*, 2nd ed., Manchester: St. Jerome Publishing.
- Saunders, J. W. (1964). *The Profession of English Letters*, London: Routledge.

- Several hands. (1680). *Ovid's Epistles Translated*, London: Tonson.
- Several hands. (1684). *Miscellany Poems Containing a New Translation of Virgills Eclogues, Ovid's Love Elegies, Odes of Horace, and Other Authors: with Several Original Poems*, London: Tonson.
- Several hands. (1685). *Sylvae, or, The Second Part of Poetical Miscellanies*, London: Tonson.
- Several hands. (1711) *The Works of Lucian*, London: Briscoe.
- Sheffield, J. (1682/1968). An Essay upon Poetry, *Critical Essays of the Seventeenth Century*, v. 2, Bloomington: Indiana University Press, 286-296.
- Sherbo, A. (1985a). Dryden as a Cambridge Editor, *Studies in Bibliography*, 38: 252-262.
- Sherbo, A. (1985b). Dryden's Translation of Virgil's *Eclogues* and the Tradition, *Studies in Bibliography*, 38: 263-276.
- Sloman, J. (1985). *Dryden: The Poetics of Translation*, Toronto: University of Toronto Press.
- Smith, F. S. (1930). *The Classics in Translation: An Annotated Guide to the Best Translations of the Greek and Latin Classics into English*, London: Charles Scribner's Son.
- Sowerby, R. (2001). Augustan Dryden, *Translation and Literature*, 10(1): 51-66.
- Sowerby, R. (2006). *The Augustan Art of Poetry: Augustan Translation of the Classics*, Oxford: Oxford University Press.
- Steiner, G. (1975/1998). *After Babel: Aspects of Language and Translation*, 3rd ed., Oxford: Oxford University Press.
- Steiner, T. R. (1970). Precursors to Dryden: English and French Theories of Translation in the Seventeenth Century, *Comparative Literature Studies*, 7(1): 50-81.
- Steiner, T. R. (1975). *English Translation Theory, 1650-1800*, Amsterdam: Van Gorcum.
- Tissol, G. (2004). Dryden's Additions and the Interpretive Reception of Ovid, *Translation and Literature*, 13(2): 181-193.
- Trickett, R. (1967). *The Honest Muse: A Study in Augustan Verse*, Oxford: Clarendon Press.
- Uman, D. and B. Bistue. (2007). Translation as Collaborative Authorship: Margaret Tyler's *The Mirrour of Princely Deedes and Knighthood*, *Comparative Literature Studies*, 44(3): 298-323.
- Venuti, L. (2001). Neoclassicism and Enlightenment, *The Oxford Guide to Literature in English Translation*, Oxford: Oxford University Press, 55-64.
- Weissbort, D. and A. Eysteinson. (2006). *Translation - Theory and Practice: A Historical Reader*, Oxford: Oxford University Press.
- West, M. (1972). Dryden's Ambivalence as a Translator of Heroic Themes, *Huntington Library Quarterly*, 36(4): 347-366.
- Winn, J. A. (1987). *John Dryden and His World*, New Haven: Yale University Press.
- Winn, J. A. (1992). *"When Beauty Fires the Blood": Love and the Arts in the Age of Dryden*, Ann Arbor: University of Michigan Press.
- 大久保友博(2010)「翻訳における一軸的批評の解体」日本通訳翻訳学会第11回年次大会口頭

発表

- 大久保友博(2011a)「ジョン・デナムの翻訳論——〈作品〉への予感」『歴史文化社会論講座紀要』
8: 49-68. 京都大学大学院人間・環境学研究科歴史文化社会論講座
- 大久保友博(2011b)「ジョージ・スタイナーと翻訳の現象学」日本通訳翻訳学会関西支部第27回
例会口頭発表
- 大久保友博(2011c)「私訳: George Steiner's *After Babel*」日本通訳翻訳学会関西支部第27回例
会配布ハンドアウト
- 大久保友博(2011d)「近代英国翻訳論——解題と訳文 ジョン・デナム 二篇」『翻訳研究への招
待』6: 17-31. 日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト
- 北垣宗治(1955)「詩の翻訳について——ドライデンの場合——」『主流』18: 47-58. 同志社英文
学会
- 佐藤勇夫(1980)『ジョン・ドライデンの翻訳理論』北星堂書店
- 佐藤勇夫(1981)『坪内逍遙におけるドライデン受容の研究——東洋と西洋における比較文学の
原点』北星堂書店
- 佐藤勇夫(編訳)(1988)『ドライデンと周辺詩人の翻訳論』ニューカレントインターナショナル